

## ワークショップ 実験場としての展覧会

### 担当学芸員による、なむはむだはむ展『かいき！はいせつとし』の一解釈

太田市美術館・図書館 矢ヶ崎結花

「なむはむだはむ展とは何か?」。この問いへの答えは、展示をご覧になった方々が見終えた感想として持っているかもしれないし、『なむはむだはむ』メンバーや金氏徹平、本展制作に関わった一人一人が持ち合わせているかもしれない。それぞれが考える「なむはむだはむ展」があるだろう。と同時に、太田市美術館・図書館の展覧会として話を持ちかけ、企画担当者である担当学芸員は、少なくともこの問いへの答えを持っていなければならない。本稿は、「なむはむだはむ展『かいき！はいせつとし』」を太田市美術館・図書館で実施する意味、意義を含め、担当学芸員が『なむはむだはむ』の実践をどのように捉えているか、ということ改めて述べるものである。展覧会鑑賞後に本稿をご覧いただき、「あなたの解釈」と照らし合わせていただくことで、本展の体験をより深く、記憶に残るものにしていただけたら、望外の喜びである。

なお、本稿は担当学芸員の見解であり、『なむはむだはむ』メンバーの捉え方と必ずしも一致していない。展覧会担当者として、およそ1年間「なむはむだはむ展」に関わったなかで捉えたことや、展覧会が開幕してから、改めて考えたことをまとめた文章である。

また本稿は、展覧会公式パンフレットに掲載されている担当学芸員による「プロダクションノート」とは異なる文章である。「ノート」では、展覧会開催に至るまでのプロセスを担当者の心情を含めて示した。実験的要素が強い展覧会であるがために起きた出来事について触れることで、臨場感を持ってこの取り組みの経緯を知っていただくことができると思われる。他方、本稿は、前者の文章と一部内容は重複するものの、あくまで『なむはむだはむ』という取り組みに関する一解釈を示すものであり、そこから、この取り組みのよさ、当館で展覧会として実施することの意義を示すことを意図している。

## 1、縛りのない表現の実験場<sup>ワークショップ</sup>：『なむはむだはむ』の実践

### 1-1、『なむはむだはむ』の発端とコンセプト

『なむはむだはむ』とは何か?特定のユニットなのか、作品タイトルなのか、それとも舞台公演のタイトルなのか。本展に来場くださる方々も、「なむはむだはむ展『かいき！はいせつとし』」の字面だけでは、展示作品が何なのか、どういう趣旨の展覧会なのか判然とし

ないまま、会場に入り込むことになるだろう。

『なむはむだはむ』は、プロジェクトの名称である。このプロジェクトは、「子どもたちのアイデアを大人たち（プロのアーティスト）がなんとか作品にする」をコンセプトに掲げ、子どもたちのアイデアを、主にパフォーマンスのかたちで発表してきた。発端は、東京芸術劇場芸術監督である野田秀樹が、「子供の書いた台本をよってたかって大人が演劇にすることはできないだろうか」と発案したことが始まりだ<sup>1</sup>。その発案から数年経ったところで、作家・演出家・俳優の岩井秀人がそのプランを野田から譲り受け、プロジェクトとして立ち上げた。岩井は、俳優・ダンサーの森山未来を誘い、子どもたちとワークショップを実施。しばらくしてシンガーソングライターの前野健太も加わり、メンバーが揃った。

### 1-2、子どもたちとのワークショップ

コンセプトにある「子どもたちのアイデア」は、「子どもたちの物語」とも言い換えられる。子どもたちとのワークショップでは、最初に、身体を動かしたり、みんなで車座になり、一人ずつ言葉を繋いで物語を作ったりして、緊張をほぐす。そうして準備が整ったら、A4サイズの紙が配られ、一人ずつ物語を書いていく。テーマや条件はない。思い浮かんだことを書いてもらう。当然ながら、人によって文章の長さは異なり、実生活の延長線上に物語を展開したり、想像上の物語を作り出していたり、文章ではなく絵を描く人もいる。そしてできあがった作品は、メンバー達が回収していく。

回収後、例えば、物語を大人が読んで、子どもたちに評価を伝える、ということは一切ない。ワークショップでの物語づくりは決して課題ではないし、何のテーマも設定されない。ただただ頭に浮かんだイメージをまっさらな紙に落とし込んでもらう、それだけだ。与えられたことに応えるのではなく、自ら生み出すことが尊重され、それができるようにメンバーは少し会話を交わしたりしながら見守る。『なむはむだはむ』のワークショップに見られる特徴は、自ら生み出す楽しみを発見する、ということにあるように見受けられる。

### 1-3、クリエーション（パフォーマンスの制作）と上演

さて、子どもたちが去り、物語を手にしたメンバーは、それらを一つ一つ読んでいき、そこから得た感触を交換していく。気になる言葉遣いや筋書きを拾い上げたり、ワークショップで集まった物語全体の印象にも意識が向かったりする。そうするなかで、パフォーマンスにする物語を絞り込む。

物語は、子どもたちから切り離されて、テキストとして独立したものとしてアーティスト

---

<sup>1</sup> 『「コドモ発射プロジェクト『なむはむだはむ』』公式パンフレット』東京芸術劇場、2017年、p.2.

により解釈される。それは子どもたちの目線に合わせたものではなく、あくまで大人であるメンバーの視点での読み取りだ。彼らが有する知識、記憶、アーティストとしての視点、それらが糺い混ぜになって導かれた解釈をできうる限り試しながら、原作である物語はパフォーマンスとして実体化されていく。内容や方法に縛りを設けず、「やってみる」ことで、物語を立体的にしていくのだ。そうすることで、一つの物語を巡って、原作者が抱いていたイメージとはまた別のイメージが立ち現れることになる。これは、『なむはむだはむ』の大きな特徴と言える。

それぞれ本業とする分野が異なる3人の掛け合いとしての制作は、森山が「三つ巴」と言い表す<sup>2</sup>ように、誰かが主導権を握っているようには見えない。ドキュメンタリー映像「なむはむ! ドキュメント」を見ると、メンバーはそれぞれの感覚で、自身の表現を混じり合わせたり、混じり合わせなかったりしながら、最終的な形態に進んでいるように見える。また、子どもたちの物語への解釈という、正解の不確かな問いに対して、各人の専門分野に拘らずに「やってみる」を繰り返すことで、そこから生まれる偶然性をも表現に取り込んでいるようだ。

こうして、子どもたちにより生み出された物語は、最終的に演劇、身体表現、音楽が絡み合ったパフォーマンスとして発表される。2017年の東京芸術劇場での初演時には、回ごとに上演作品が異なり、公演中も新作が生み出された<sup>3</sup>。彼らの有機的、流動的な「実験場」<sup>ワークショップ</sup>は、子どもたちとのことだけでなく、彼らの制作と上演にも共通すると捉えることができるだろう。

最後にまとめれば、『なむはむだはむ』とは、①ワークショップにより子どもたちが物語を生み出し、②メンバーが物語を読み込み、解釈し、③演劇、身体表現、音楽などを絡ませたパフォーマンスをメインに、なんとか作品として発表する、という一連の実践である。2017年、東京芸術劇場での舞台初演以来、NHK Eテレの「オドモ TV」における「オドモのがたり」<sup>4</sup>、「なむはむ! ドキュメント」<sup>5</sup>、「なむはむだはむ LIVE!」<sup>6</sup>と、さまざまな舞台・媒体で発表を重ねてきた『なむはむだはむ』に通底しているのは、「子どもたちのアイデアを大人たち（プロのアーティスト）がなんとか作品にする」というコンセプトであり、その「実験場」<sup>ワークショップ</sup>としての在り方である。

---

<sup>2</sup> 『なむはむだはむ展『かいき! はいせつとし』公式パンフレット』太田市美術館・図書館、2023年、p.2.

<sup>3</sup> 同上、p.5.

<sup>4</sup> 2018年4月から2021年3月まで放映。3分未満のミニマムなパフォーマンス。

<sup>5</sup> 2021年7月に『なむはむ! ドキュメント ~俺としらすと江ノ電と~』、『なむはむ! ドキュメント ~俺と松戸といぬのゆめ~』を日本映画 NET にて放映。監督:尾野慎太郎。ワークショップからパフォーマンス上演までを追ったドキュメンタリー映像。

<sup>6</sup> 2021年7月10日、渋谷 WWW で開催された。それまでに制作された楽曲で構成された LIVE 公演。

## 2、『なむはむだはむ』の魅力

このような『なむはむだはむ』の魅力とは何か。それは、前述した「<sup>ワークショップ</sup>実験場」としての実践であると私は考える。『なむはむだはむ』は、物語を生み出す子どもも、その物語を解釈し、作品に展開させるアーティストも、そして鑑賞者でさえも、社会において枠付けられる「役割」とは切り離されたところで表現に没頭できる「場」であり、そこに魅力がある。

### 2-1、『なむはむだはむ』の魅力——子どもの側から

まず、子どもたちから考えてみよう。物語ワークショップの対象は小学生が主となる。彼ら彼女らは、小学校という教育機関で、社会の一員となるべく教育を受けている<sup>7</sup>。学校教育では、評価がなされ、あるべき方向へと成長が促される。そのあるべき方向から外れる場合、低評価が付されるのは、目的を明確に持った義務教育のシステムからして仕方がないことであるが、その外れる表現にも『なむはむだはむ』では目を向けることができる。

社会における秩序を軽々と飛び越えるような破天荒な物語、現実では考えられないような時間設定や速度設定、言い間違いや書き間違いの多発、学校では捨象されてしまうだろう「うんこ」などの排泄物の表現、さらには登場人物の死。成長過程にあるからこそ発してしまう子どもたちの「<sup>なま</sup>生の」表現は、「自由」という一言では片付けられないほど力強い存在感を放って存在する。このような表現は、社会で不都合なく生きていくためには不要かもしれない。（なぜなら、社会とは人々の集まりであり、集団がともに生きていくためには秩序が必要であるため、それを度外視する表現は通常生活を営むうえでは必ずしも必要ではない。）それゆえ、学校では評価されづらい。けれども、こうした言葉を自身で使い、その意味を体得しながら物語を生み出すことは、成長過程にある子どもたちにしかできないことでもある。

「ヤングケアラー」という言葉が市民権を得た昨今、社会において大人と同じ「役割」を背負わなければならない子どもたちが顕在化しているが、学校でも家庭でもない場所で、何の「役割」も背負わずに、表現に没頭できる場は貴重である。つまり、子どもが、成長過程という一時期に持ちうる想像世界と、それをあらわす言葉の選択、文章としての表現を放出し、受け止める場として、『なむはむだはむ』の「<sup>ワークショップ</sup>実験場」は機能する。このような点において、『なむはむだはむ』は社会的にも意味がある。

---

<sup>7</sup> 義務教育を規定する教育基本法第一条では、その目的として「人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」と記載している。（文部科学省 HP 参照：[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/kihon/about/mext\\_00003.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/mext_00003.html) ※2023/3/15 最終アクセス）

## 2-2、『なむはむだはむ』の魅力——大人の側から

前野健太は、子どもたちが生み出す言葉について次のように語る。「言葉は大人になったら、『知っている』『理解している』と思いがちだけれども、実はそうでもないんじゃないかな。最初に『なむはむ』に入ったときに、岩井さんからテキストを見せてもらって衝撃を受けたんですね。自分が知っているその『言葉』なはずなのに、まだまだ意味があるんじゃないか、と思わされた」<sup>8</sup>。子どもたちの物語に見る言葉運びの妙は、今まで見知っていた言葉とも改めて出会い直させてくれる。それにより、固定化された言葉の捉え方も、更新が促されるのかもしれない。

岩井秀人は、各人の専門分野に拘らず「やってみる」を繰り返すなかで、誤作動も取り込みながら制作を進める過程を「アンコントロールを楽しむ」<sup>9</sup>と表現している。子どもたちの物語から始める、という設定からそもそも「アンコントロール」であり、さらにメンバーの表現とその応答で生じる、うまくいかなさを取り込むことで、突発的なこと、偶然性を楽しみ、そこから仮設的に作品を組み立てているようにも見える。

創造過程において、それぞれの軸となる領域が「ズレて」いき、さらには「崩れて」も成立するのが『なむはむだはむ』と述べる<sup>10</sup>森山未来も、この自由度を許容する「場」としての在り方に可能性を見出しているように見える。

『なむはむだはむ』の「場」には、年齢や肩書に投影される、社会的な「役割」から外れたところで言葉や事物を捉え、「やってみる」ことへのハードルを下げ、うまくいかないことも楽しみとして受け入れられる土壌がある。それは、メンバーが長年の付き合いにおいて作り上げた「場」なのだろうが、それを客席や画面越しで見るとき、鑑賞者も、メンバーの感覚を共有し、同様のものの捉え方へ導かれるようなところに、このプロジェクトの魅力がある。

## 3、「<sup>ワークショップ</sup>実験場」としての展覧会：なむはむだはむ展『かいき！はいせつとし』

### 3-1、「<sup>ワークショップ</sup>実験場」としての展覧会

展覧会でタグを組んだ金氏徹平は、メンバーとの制作過程において、自身やメンバーの子ども時代にも意識が向くと述べる。そのような意識において協働を進めることで、「いまここにある固定化した自分や、自分が背負っているものだけではない関係」になっていき、その関係性自体を展示に反映させることも試みたい、と座談会で発言している<sup>11</sup>。

---

<sup>8</sup> 本展公式パンフレット p.27.

<sup>9</sup> 同上 p.4.

<sup>10</sup> 同上 p.2.

<sup>11</sup> 同上

展覧会の構成は、20回にもおよぶミーティングで少しずつ形になっていき、最終的に、立体造形、写真、映像、テキスト、グラフィック、音による展開によって、『なむはむだはむ』の実践を館内にひろげる内容となった。各作品については、ディレクションを担う人は決めていたが、それでもアーティスト全員で話し、「やってみる」を繰り返しながら形にしていった。こうしたプロセスは、個人活動になりがちな美術の作品制作にはあまりない方法かもしれない。ディレクションを担当したアーティストも、他者の言葉に耳を傾け、それにゆだねてみる、ということが多分にあったと思われる。そうした、決め込まない作品創造の場、つまり「実験場<sup>ワークショップ</sup>」としての現場それ自体が展覧会になっているのであり、それは金氏が言う「関係性自体」を展示に反映させる、ということにつながる<sup>12</sup>。

このような決め込まない態度は、展覧会場における文字情報の少なさにも反映され、来場する方々は戸惑われるかもしれない。けれども、この「実験場<sup>ワークショップ</sup>」に体当たりで出会っていただくために、少々乱暴ではあるが、今回は最小限の説明文に留めさせていただいた、という経緯もある。

### 3-2、展覧会場で『はいせつとし』を見る

本展のタイトルには『はいせつとし』があてられている。すべて平仮名で表記されているが、皆さんはどのように受け取っているだろうか。

このタイトルには、読む人に自由に解釈してもらいたい、という願いも込めているため、意味は明らかにされていない。が、担当として、このタイトルから読み込める、本展を象徴する展示についても説明させていただきたい。

本展は、美術展目当てに来場した人だけでなく、当館に来場したすべての人に『なむはむだはむ』の場を体験してもらいたい、という願いと、各作品の性質に適した展示場所の選択をする、という方針のもと、当館全体を使った展覧会となっている。くまなく展示をご覧いただくために、マップ付きのハンドアウトを配布しているが、そこに▲印が付されているの見逃さないでほしい。この印の場所14か所には「うんこの点在」と題されたグラフィック展示がある。「うんこ」や排泄を意味するような言葉を子どもたちの物語から抜き出し、彼ら彼女らの書いた文字そのままに、塗料やカッティングシートで館内に落とし込んでいるのである。

「うんこ」は、子どもたちの物語に比較的多く出現する。その語義をご存知だろうか。広

---

<sup>12</sup>展示室1の「くりっらがおれた」の作品群においては、『なむはむだはむ』の「実験場<sup>ワークショップ</sup>」としての在り方が明確に現れている。デザイナーの平野篤史が率いるAFFORDANCEが「くりっら」を物々交換されていくシステムで提示しているが、本作は、来場者も、「くりっらがおれた」というアイデアへの解釈を伴う実験に参加することにつながり、さらには、「くりっら」を介して『なむはむだはむ』が来場者との関係性を取り結ぶことも可能になっている。

辞苑では、「[幼児語。ウンはいきむ声、コは接尾語] 大便。うんち。」<sup>13</sup>とされ、小林良夫「排泄をめぐる幼児語の研究—その1—」<sup>14</sup>においては、次のように説明されている。「いうまでもなくうんこは話し言葉であって書き言葉ではない。したがって適切な漢字はない。しいていえばうんには、“吽(うん)”の字があてられようかと思う。接尾語のこは、親愛の情を示すときに使われる。例えば、岩手県の民謡「からめ節」にいう“べこコ”や秋田県の「どんぱん節」に見られる“わらびコ”、“米コ”がそれである」<sup>15</sup>。つまり、排便を促す掛け声に親愛の情を示す接尾語が付けられて、この語が成り立っているのだ。小林は、幼児向けの絵本に見られる「うんこ」や「うんち」を洗い出し、言葉の成り立ちを分析しつつ、次のように説明を続ける。「うんこやうんちの言葉、特にうんちは、健康管理上きわめて重要な排泄の円滑化を図るため、その前提となる大便の実態を損なわない範囲で抽象・美化し、大人たちの不快に伴う抵抗を少なくしようと努めてきた保育者たちの努力の結晶といえる」<sup>16</sup>。ここから、大人と子どもをつなぐ言葉が「うんこ」や「うんち」であり、人間の生に直結する非常に大切な言葉であることが読み取れる。

「うんこ」は、その実態の性質上、一般的な大人の生活においては忌避されがちな言葉であるが、上述したように、人間の生と切っても切れないものである。それを、館内にひそやかな佇まいで点在させ、思わぬ出会いが果たせるようになっているのだ。

美術における排泄表現と「生」との関連を補足すると、成相肇は、「アート・スカトローグ採集ノート（最近の美術にみるうんこやおしっこやその他排泄物との付き合い方）」<sup>17</sup>において、20世紀以降の美術における排泄物を取り扱う作品を列挙し、さらにそれらの作品の特徴を分析している。そこに示される4つの特徴のうち、本展での展開は4つめに紹介される「裸性」の性質を有するものと捉えることができる。この性質は、「ありとあらゆるものの中でも最もあらわな、人の作り出すもの一般、あるいは身体や生命、そして死（排泄物は生命活動から切り離されて死んだ身体の残滓だ）の謂い」<sup>18</sup>と説明される。排泄物は、身体、生命、死、という、生物そのものを包括して象徴することも可能とするのだ。

メンバーおよび金氏は、本展開催にあたって、400にのぼる子どもたちの物語を総ざらいした。そこで浮かび上がってきた排泄表現は、本展で、大人と子どもをつなぐ言葉として、さらには死をも含む生物を包括する言葉として、展示全体を包み込むように存在するともいえよう。

<sup>13</sup> 『広辞苑第6版』より引用

<sup>14</sup> 『東海女子短期大学紀要』、1996年、pp.131-138.

<sup>15</sup> 同上、p.133.

<sup>16</sup> 同上

<sup>17</sup> 『第1回所沢ビエンナーレ美術展 カタログ』所沢ビエンナーレ実行委員会、2009年、pp.262-266

<sup>18</sup> 同上、p.264. ルビは矢ヶ崎によるもの

#### 4、終わりに

「なむはむだはむ展」とは何か？担当学芸員としての答えは、大人も子どもも、「やってみる」が許容される、「『実験場』としての場の在り方」だ。「実験場」が展覧会になり、『なむはむだはむ』の実践がより広く体験されることに、大きな意味があると考えている。

本展公式パンフレットの「プロダクションノート」に書いた展覧会企画の動機は、美術館と図書館という異なる二つが合体して一つになっている当館と、子どもと大人が合体して一つになっている『なむはむだはむ』が似た存在であり、幅広い来場者が来る当館の全体を使って、同プロジェクトに出会う機会になってほしいということであった。それに加えて、本稿2『『なむはむだはむ』の魅力』で述べたように、「社会において枠付けられる「役割」とは切り離されたところで表現に没頭できる「場」は、家庭でも、学校でもない、社会教育施設である美術館・図書館であるからこそ、実現する価値がある。

展覧会は3カ月弱の期間限定だ。それが終わったら、外壁のグラフィックも、館内の「うんこ」も跡形もなく消えてしまう。その前に、この『なむはむだはむ』の「場」に、一人でも多くの方々に足を踏み入れていただきたいと思う。日常生活における「役割」を忘れて、一人の人間として『なむはむだはむ』としての場の在り方を体感いただけたら、きっとそれまでにはない新たな視点を手に入れ、豊かな生への一助になると確信している。